

# 御祓川からまちを再生する

株式会社御祓川 チーフマネージャー 森山 奈美

## 1. 水に流す

うれしさや御祓の宵の天の川

小林一茶（文化二年 文化句帖）

御祓川の語源は、この川で行われる夏越の大祓いからきている。この神事は全国で行われているもので、旧暦の六月晦日に上半期の罪を祓う。したがって、御祓は夏の季語になる。小林一茶は生涯に約二万の俳句を残しているが、その中で「御祓」に関わる夏の句は約四十句確認されている。民俗学的に、「日本人は水に流したがる」という話をきいたことがあるが、大陸に比べると急流の日本の川は、何かを落としても翌日にはきれいに流してくれる。横のつながり、つまりコミュニティを重視したため、笑って「水に流す」習慣が生きる知恵として備わっていた。村八分も一般に考えられているいじめの要素ではなく、むしろ水に流すための通過儀礼としての性質が強かったらしい。

たしかに、水に流すことは日本の文化として大切なことだったかもしれない。しかし、高度成長の波の中で、人々は無くしてはならない川と生活とのつながりや、自然への畏敬の念さえ、水に流してしまったようである。現実の御祓川は、河口付近の地盤沈下で流れがよどみ、周辺的生活排水の流入でますます水質汚染が進み、名前とは裏腹の“ドブ川”となっていた。それはまるで、大祓いの神事で流した人間の罪が、流しきれずに黒いヘドロとなって川底にたまっているかのごとく、夏になると異臭を放ちながら人間に抗議をしている。



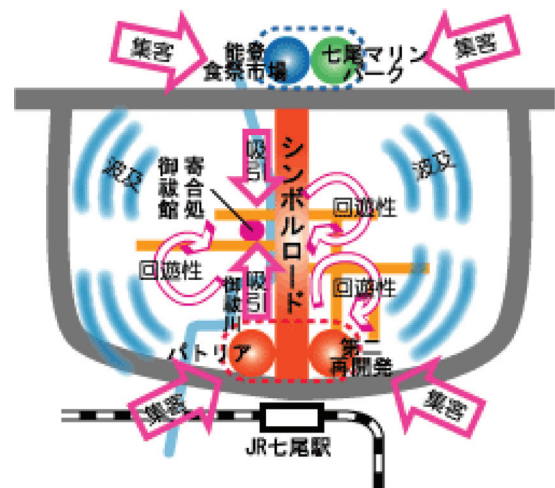
七尾市中心市街地を流れる御祓川

## 2. 港からまちへ

石川県七尾市は、能登半島の中央部に位置する人口約6万4千人の港町である。加賀百万石の前田利

家が最初に城持ち大名となった城下町でもある。利家は、七尾港へと注ぐ御祓川を境に商人町と職人町に分けた城下を築き、その町割は現在も中心市街地の基盤となっている。

御祓川周辺のまちづくり活動を振り返ると、1985年頃から展開された「七尾マリシティ」運動にさかのぼる。当時の（社）七尾青年会議所が、政治的にも経済的にも非常に落ち込んでいた七尾で「海・港」から「まち・経済・市民意識」を再生する「マリシティ構想」を打ち出した。その構想にもとづき、七尾マリシティ推進協議会を立ち上げ、能登食祭市場という港の拠点をつくりあげた。1991年のことである。能登食祭市場のオープンによって、寂れた波止場が、年間90万人の訪れる核施設に生まれ変わり、開業後11年間で入場者数1000万人を達成し、ますます盛況を呈している。さらに、平成7年には駅前再開発ビル「パトリア」が開業し、私たちは中心市街地に2つの集客核を持つことになった。七尾マリシティ構想では、この2つの拠点、すなわち港と駅を結び、シンボルロード整備によって都心軸を形成し、既存の商店街への波及効果を狙うというシナリオを描いている。（下図）



港と駅の核を結んで賑わいをまちなかへ

この軸づくりにあたって、私たちが目にしたものは汚染の進んだ御祓川であった。

「御祓川の再生なくして、七尾のまちづくりはない」マリシティ運動の当初からの主要メンバーが、まちづくりの次のステップとして、御祓川とその周

辺の賑わいを創り出すことで合意し、1999年6月、出資者8名、資本金5000万円の民間まちづくり会社(株)御祓川が船出した。(現在は、増資されて出資者20名、資本金6800万円)会社の設立準備は最初の会合から設立総会まで、わずか6ヶ月。純民間による意思決定の速さと関係者の熱意が、短期間で諸々の調整を推し進めていった。現在ならば、おそらくNPO法人を設立することになるだろうが、当時の出資者らにとっては、株式会社という形態と、ひとり500万円以上という出資額が、自己責任で進めるまちづくりへの意思表示として受け取られていたようである。

### 3. 御祓川がつながイエ・ミセ・マチ

#### 3-1 川からまちづくりに取り組む意義

(株)御祓川では、御祓川の再生を3つの側面から捉えている。一つは、「御祓川の浄化」によって川そのものの水質が改善すること。2つめは「界隈の賑わい創出」である。川沿いに質の高い店をつくり、街の側から川を再生する。店を通して人々の賑わいを創り出す。そして3つめが「コミュニティ再生」だ。川のことを思い、まちのことを思いながら行動する人々のつながりをつくっていくことである。御祓川の事業内容は、この3つの柱で整理される(下表)。これらは、人々が川との関係を取り戻しながら、地域経済やまちの文化とのつながりをも取り戻していくことを目指している。

(株)御祓川の事業内容

御祓川の浄化	界隈の賑わい創出	コミュニティ再生
御祓川水質調査ワークショップ	寄合処御祓館の整備 マーケティング塾 御祓川2号館の整備 出店プロデュース テナントミックス計画の立案	全国ドブ川市民サミットの企画運営 まちづくり塾 しるべ蔵運営検討委員会 各種イベント企画運営
御祓川浄化研究会 七尾湾研究会	暮らしっく館葦の運営 まいもん処いしり亭の運営 寄合処御祓館棚貸事業の運営	川への祈り実行委員会事務局 七尾湾沿岸全住民会議事務局 あるもの探し研究会 参画

(上段：過去の実施事業、下段：現在進捗中の事業)

このことを私たちは「イエ・ミセ・マチの関係を再生する」と表現している。かつては自分の生活と地域の自然環境とは、もっと密接に関わっていた。同様に、地域経済と地域の構成員は一心同体であった。しかし、これらのつながりは高度成長と共に切り離され、生活の中にあつた環境や経済は、どん

ん外部化されていった。飲み水は、地域の環境が荒らされてもパイプを通して消毒された安全な水が蛇口をひねれば出てくるし、地域の農地が荒れていても、流通の力で食べ物はどこからでも運んで来ることができる。大資本の会社勤めなら、地域経済が衰退してもお給料とは関係ないし、大型ショッピングセンターで買い物をすれば、地域で稼いだお金をせっせと外部資本に運ぶことになる。つながりが薄くなった分、想像力を強く働かせなければ、イエ・ミセ・マチの関係を意識することはできない。

しかし、御祓川という一本の汚れた川を目の前にしたときに、そのすべての都市問題が凝縮されて見えてくるのである。ここに、川の再生からまちづくりに取り組むことの大きな意義があると感じている。それは、単に中心市街地の活性化という概念を超えて、私たちの生活や社会を再構築することを目指すことになるからだ。

#### 3-2 店づくりはまちづくりーミセとマチの関係

私たちの運動では、御祓川再生にあたり「店」という仕掛けを使っていることが特徴である。(株)御祓川がプロデュースした美容院では、2階から見下ろす御祓川の風景を楽しみながらヘアスタイルを決め、髪を切りながら「川がもっときれいになったらいいね、できることからやろうね」という会話を交わし、きれいになった女性をどんだん川の周りに送り込んでくれる。川沿いに移転するにあたって、パーマ液等の排水を無害にして流すシステムを取り入れるなど、川のあるまちで商売をさせていただくという基本的な姿勢を貫いている。



御祓川を見下ろす美容院のカウンター

飲食店では食べることを通じて水の大切さをアピールし、地元の工芸品を紹介することで、御祓川が育んだ七尾文化に触れていただく。夜になると店の灯りが情緒的な川沿いの風景を創り出す。その町で商売をする人が、本気で自分の家業を見つめなおし

ていくと、まちの文化のお陰で自分の商売があるということに気づく。川沿いの店は、川に目を向ける人々を増やし、私たちのまちが持っている財産を確かめ合う場であり、川沿いに元気を吹き込む窓である。

このように（株）御祓川では、川沿いの店からの働きかけによって、まちと一体的な川再生を目指している。店づくりとは、極めて私的な行為に感じられるかもしれないが、地域の人々に愛される店をつくるということは、実はそのまま「まちづくり」と言えるのではないか。

### 3-3 川との関係を取り戻すイエとマチの関係

御祓川界限は、もともと青柏祭や市民総踊り、秋の大市など、まちなかのステージとして利用されてきた。（株）御祓川の設立以降は、ますます川沿いを使う機会が多くなっている。しかも、（株）御祓川が企画したものでなくても、イベントの舞台として御祓川沿いが選ばれることが多くなっており、大いに歓迎している。川と市民との関係が生まれている証拠だからだ。川沿いでの定期市「能路市場」、商店街の各種イベント、橋の上でのジャズライブ、オープンカフェ、川沿いでキャンドルを灯すイベントなど、市民の目に川が映る機会が増えることによって、前述した「イエ・ミセ・マチの関係の再生」に向けた問題提起が、より身近なものとなる。

たしかに私たちの生活は、ずいぶんと川とは関係なくなってしまう。今更、川で洗濯をする生活には戻れない。しかし、私たちは現代の生活の中で川と新しい関係を結ぼうとしている。川を傷つけながら生きてきた数十年間で崩れたバランスをもう一度、川に寄り添いながら生きるライフスタイルの中から見つけ出そうとしているのである。

## 4. 川への祈り実行委員会

### 4-1 合言葉は「川はともだち」

（株）御祓川が設立された翌年、川への祈り実行委員会が設立された。きっかけは、御祓川の再生を願うチャリティコンサートを開くことであった。コンサートの準備にあわせて、「川への祈りFUND」を立ち上げ、一口1,000円で浄化のための資金を募った。FUNDに協力してくれた方をコンサートに招待するという形で、このときに集めた資金を元に、川への祈り実行委員会は、川そうじ&川あそび、源流探検、ふるさとの川セミナーと次々に活動を展開していった。合言葉は「川はともだち」である。川と市民と

の関係を取り戻すことを活動の中心にしている。

### 4-2 排水路対抗！御祓川浄化大会

最近では、「排水路対抗！御祓川浄化大会」やオリジナルソングの発表など、市民活動らしい自由な発想で活動を続けている。浄化大会とは、下水道が未整備の地区だからこそ成立する大会である。下水道がないということは、私たちが家庭で使った水が、下水管に流れ込むのではなく川に排水される訳で、下水道が整備されている地区よりも川と生活の関係が深いということができる。

そこに着目して、特に汚れの目立つ排水路を選んで、一定期間に排水の水質（BOD）がどれくらい改善するかを競った。大会に参加するのは子供たちで、チームごとに担当排水路を決めて、流域の家庭に呼びかけを行なった。手づくりのチラシをつくったり、お願い文を書いたり、漫画やイラストで取り組んでもらいたいことをまとめるなど、チームごとの工夫が凝らされた。子供たちからの訴えは、流域の大人たちの心に少なからず影響を与えたようだ。1ヵ月後、呼びかけを行なわなかった排水路の水質がすべて悪化していたにも関わらず、呼びかけを行なった排水路のほとんどが改善していたのである。

### 4-3 クレソンケーキ

川への祈り実行委員会では、2002年より、御祓川浄化研究会に参画し、産官学民の共同研究によって、御祓川の浄化方策を研究している。机上の研究ではなく、現場での実験を通して失敗を繰り返しながら浄化装置を手づくりで改良していくというプロセスをたどっており、昨年ついに「御祓川方式」と言える浄化システムの原型が完成した。



植物による浄化施設ビオパーク（ここでクレソンが育つ）

さらに、この浄化装置で育つクレソンを利用して、新しいコミュニティビジネスが生まれている。クレソンと言うと、レストランでステーキやハンバーグ

の上に添えられる香味野菜だが、川の富栄養化の原因となるリンや窒素を養分として除去してくれる。そのクレソンをケーキにして販売している。「甘すぎなくて、おいしいね。」と、お客様にもなかなか好評だ。クレソンの緑がちりばめられたリングケーキは、1リングにつき100円が、「川への祈りFUND」に寄付されるしくみだ。ケーキを食べて集まったFUNDは、装置の維持費や浄化大会などの経費として使われる。御祓川で育ったクレソンを口にすることで改めて、川との関係にも気づく。ケーキを食べて、御祓川をきれいにしようという、“おいしい”取り組みが広がりつつある。



ケーキを食べて浄化に参加（生のクレソンも1束100円で販売中）

#### 4-4 御祓川まつり

2004年の夏には、地元神主らの協力によって「御祓川まつり」を創めるに至った。これは、いわゆる神なき祭りと言われるイベントではなく、神事を伴った祭りである。御祓川の語源にしたがい、夏越の大祓いを復活させ、「清水流しの儀」などを執り行い、川

沿いから清流の復活を祈る。なおらい直会としてみそぎ縁日を開き、川沿いで夕涼みをしながら灯籠を流す、夏の御祓川の新しい風物詩として育てていこうと、夢は広がる。こういった取り組みが、町衆の動きへとつながっていけば、あるいは日本古来のマチとヒトとの関係を取り戻していけるかもしれない。

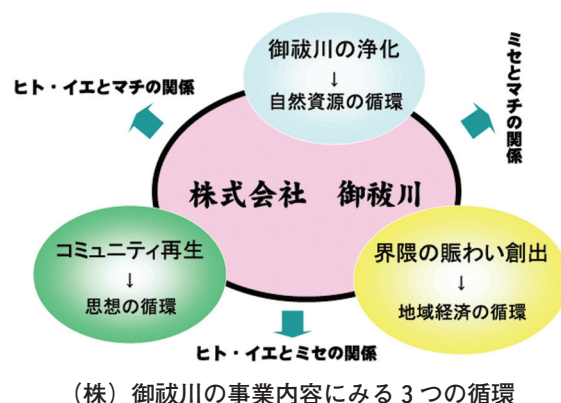


御祓川まつりで川の中央に建てられた御神竹

### 5. 川からはじまるまち再生

御祓川の浄化に取り組むということは、水という

かけがえのない恵みに感謝し、自然資源の循環を目指すことである。川沿いの賑わいを創出するということは、まちの文化に支えられた地元資本の可能性を伸ばし、地域経済の循環を目指すということである。また、川を中心としたコミュニティ再生とは、まちへの想いを次世代へとつなぎ、持続可能なまちづくりを支える思想を受け継いでいくことである。このように、(株)御祓川の事業は、3つの循環をつくることによって、イエとミセとマチの関係の正常化を目指している。この基本的な考え方を確認しながら、他の主体との連携を図り、これからの活動を展開していきたい。



御祓川沿いが一年でもっとも元気になるのは若葉の頃。5月3～5日に行われる青柏祭だ。高さ12m、重さ20トンの「でか山」が曳き出され、祭囃子で細い路地を練り動くと七尾っ子は血が騒ぐ。祭の最終日、御祓川沿いに3台のでか山が揃い踏みする。御祓川は数百年に渡って、このでか山の雄姿を映してきた。これからも世代を超えてまちづくりは続いていく。川からの恵みに感謝して、一人一人が輝けるまちを育て、川の周りで生まれる物語を生み出していきたい。



株式会社 御祓川HP <http://www.noto.or.jp/nanao/asi/>